

2018年5月

## 「コリグ」51号 目次

巻頭言（1～2）センター長就任のご挨拶（3）共同利用・共同研究拠点認定に向けて（3）14th International Workshop on Higher Education Reform 報告（4）第45回研究員集会報告（5）高等教育公開セミナー報告（6）学生シンポジウム報告（第4回）（7）国際ワークショップ開催報告（8）2017年度の公開研究会（9）センター往来（10）新任者・離任者・就職者から一言（11～15）情報調査室だより（16）

## 巻頭言



### 国立大学協会に問われていること

荒井 克弘  
(東北大学名誉教授)

国立大学協会とは、国立大学関係者の総意を反映し、社会の他のセクターとの関係改善・調整を図る組織と思っていた。筆者自身も1980年代から10年余り、第二常置委員会・入試委員会の専門委員を務めてそれなりの理解はしているつもりである。だが、現状は各国立大学の期待に応えられる組織となっているだろうか。この数年、自分の内にわだかまっていた気持ちを、あらためて実感する機会があった。2月初旬に催された東京大学高大接続研究開発センターのシンポジウムでのことである。司会進行役を務めていた南風原朝和センター長が前国大協入試委員長の片峰茂氏に入試委員会の意思決定プロセスについてある疑問を糺した。いや確認をしたというべきだろう。若干、事情説明を付記しておこう。

国立大学協会は昨年（2017）6月と11月に総会を経て2つの方針を出した。前者が「高大接続改革の進捗について」に対する意見、後者が「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針—」である。先のシンポジウムとの関連で、英語の民間四技能試験に焦点を絞れば、6月の「意見」では「グローバル人材育成の観点から（中略）大学入試センターが認定する民間の資格・検定試験（以下「認定試験」）を活用すること自体には一定の合理性はあるものとする」と述べたうえで、「少なくとも共通テストにおける英語試験の存続については、平成33年度入学者選抜に導入される認定試験の実施・活用状況等を検証の上、その後のしかるべき時期にあらためて判断すべきである。」とした。しかるに、11月に示した基本方針では「国立大学としては、新テストの枠組みにおける5教科7科目の位置づけとして認定試験を「一般選抜」の全受験生に課すとともに、平成35年まではセンターの新テストにおいて実施される英語試験を併せて課すこととし、それらの結果を入学者選抜に活用する。」と表明した。6月の段階では民間テストの利用に一定の合理性を認めつつも、大学入試センター試験の検証の必要、認定試験については「認定の基準、学習指

No. **51**

導要領との整合性、受験機会の公平性を担保する方法や種類の異なる認定試験の成績評価の在り方を早急に検討し、それらの見通しを示すべきである」との条件を付していた。それが半年も経たぬ間に認定試験を「一般選抜」のすべての受験生に課すことにし、6月の「意見」に付されていた条件を反故にしたのである。

南風原氏は、それを疑問に思い、入試委員会の意思決定の手続きについて片峰氏に尋ねた。片峰氏は「改革は迅速さを要する」と述べ、すでに国立大学の総意はアンケート調査で結果がでており、それを根拠とした、と答えた。細部は多少違う表現であったかもしれないが、要点はそういうことである。国大協アンケートの集計結果はシンポジウムで片峰氏自身が披露している。奇妙なことに、アンケートの該当項目に「反対」の選択肢はなく、「賛同」、「概ね賛同」又は「意見なし」を合わせた67%の数字だけがスライドに記載されていた。仮にも、認定試験の採用と共通テストの英語の存続か廃止かという重要な事項の調査である。「反対」の選択肢がなく、「意見なし」を賛同に含めた集計だけの報告はさすがにあり得ない。

これを根拠とするのなら、国立大学協会の決定は無効であろう。しかも、片峰氏のスライドには、その他の主な意見として「認定試験の諸問題が解決されていない段階で方針決定するのは時期尚早ではないか」が付記されていた。6月の「意見」に付されていた条件が反故にされたという何よりの証拠である。

上記のシンポジウムでは、「認定試験」の諸問題が羽藤由美教授（京都工芸繊維大学）、阿部公彦准教授（東京大学）の報告のなかでつぎつぎと明らかにされた。「構成概念の異なる種類の試験を使うことは入試の公正・公平に反する」「スピーキングの評価には複数の専門家の協力、多くの時間と労力を要する」「大規模試験でその条件をクリアすることができるのか」「英語の四技能テストでは四技能を均等に測るといえるが、如何にして?」「四技能の得意不得意には個人差があり、四技能均等学習はむしろ英語学習を阻害する恐れがある」「スピーキングにはコンテクストが大切であり、母語であってもスピーキングが苦手なひとはいる。見えない障害を抱えたひとに対する配慮はどのようにするのか」等々、認定試験にかかわるさまざまな疑問、問題点が指摘された。語られたのは単なる政策批判ではない。外国語学習における「読み、書き、話す、聴く」の重要性を踏まえつつ、公平・公正な入試を実施するための条件が述べられたのである。高校側の代表として登壇した宮本久也校長（全国高校長協会会長）は「改革に反対ではないが、用意が整っていない」「四技能試験を受けると云われてもその受験機会は地域によって異なり、経済的な格差は覆いがたい」「是が非でもいまのスケジュールで実施するというのであれば、できる限りそのバーを低くする、ウエイトを小さくすることを要望する」と強い調子で訴えられた。

今回の高大接続改革は明らかに行政主導で進められている。中教審や高大接続システム改革会議に国大協の要職にいる人々も参加されていたが、必ずしもその専門家ではない。しかも、審議会やこの種の会議は概ね議論の場ではなく、合意を形成する、あるいは綻びを繕う場となっている。最近とみにその傾向が著しい。そうした審議会のなかで、大学関係者は他のセクターの代表と違い、利害関係を超越して有識者として発言できる例外的な立場である。それが果たせなくて何の代表であろうか。

高大接続改革では、審議の後半になって、南風原氏などのテストの専門家が参加することになり、新テストの見直しに懸命の努力を続けておられるが、道は険しい。しかしもともと、大学入学者選抜はその教育責任を負う大学の仕事である。大学人全体がこの問題にもっと自覚的になってよいはずだ。共通テストについても、高校までの学習指導要領をそのまま反映して事足りるという話ではない。共通第1次学力試験も大学入試センター試験も大学の責任に属する大事業であった。高校までの学習指導要領の目標、高校で学んだ知識・技能は尊重するが、共通テストで大学が重視したのは大学自身が発信する教育メッセージであった。同時代の企業、行政、政治の思惑をこえて大学独自の考え、教育の観点を発信する貴重なメディアであったからである。だからこそ、多忙な時間を割いて年間50日近くも多数の大学教員が昼夜にわたって試験問題の作成に尽力する体勢が維持されてきたのではなかったか。既成の圧力に押し流されることなく、自らの使命を果たすことが大学人一人ひとりに求められている、その期待は、国立大学協会においてはなおのこと大きいはずだ。

## センター長就任のご挨拶



山本 陽介

(理事・副学長(研究担当) /

((併任) 高等教育研究開発センター長 / 理学部 / 大学院理学研究科教授)

本年度から、本学の学術担当理事・副学長との併任として、センター長に就任いたしました。よろしくお願い致します。

現在、広島大学は世界的に活躍できる大学たべく鋭意改革を進行中であり、当センターの改革もその一環であります。

10年目の設置時限を迎えるにあたり、昨年度大学本部によるセンターのレビューが行われ、期待や厳しいご意見を踏まえた結果、当面四年の存続が決まりました。今後四年間に期待される成果を出すべく、学内とのさらなる連携や研究推進および世代交代を加速させるために、学術担当理事・副学長のセンター併任が決定されました。同時に、外部の研究者を積極的にセンターにお迎えすることにより、研究プロジェクトの再編と刷新も進めて参ります。

こうした思い切った改革については、関係者の皆様の中には、衝撃的に受け止められる方もおありかと存じます。しかしながら、当センターをより魅力的な研究センターとして維持発展させるために必要な「新陳代謝」だとお考えいただき、ご理解いただければと存じます。関係者の皆様とは、これまで以上の連携・協力を進めて参る所存ですので、引き続きご協力の程、よろしくお願い致します。

## 共同利用・共同研究拠点認定に向けて

大膳 司

(高等教育研究開発センター副センター長/教授)

『コリীগ』第49・50号でお伝えしてきましたように、文部科学省では、大学の最新研究設備や大量の学術資料・データ等を、個々の大学の枠を超えて、全国の研究者が共同で利用し、共同研究を行う「全国共同利用・共同研究」システムの整備を進めています。

2010年から現在まで全国で70機関近くが拠点認定を受け、活動中です。その多くは大型の研究設備や施設が必要な、理工学系や医学・生物学系の研究機関で、人文・社会科学系で拠点に認定されているのは、まだ少数です。高等教育研究、教育学研究関係の研究所は、今のところ含まれていません。当センターは、2020年12月、日本高等教育学会の推薦も受けて、2021年度スタートの「全国共同利用・共同研究」拠点事業に申請し、高等教育研究拠点として名乗りをあげましたが、残念ながら、認定には至りませんでした。

しかしながら、幸いにも、2016年から6年間のスタートアップ予算が措置されており、引き続き、「大学の教育研究の生産性向上」をメインテーマとして、共同利用・共同研究体制の充実を図るという目標に向かって事業を展開していく所存です。

すなわち、当センターが高等教育研究の拠点となるべく、海外と日本の研究者ネットワークの形成・強化、物的・人的研究リソースの充実を力注ぎます。中でも2016年度から新たに始めた高等教育の公募型研究の推進を強化したいと思います。これは当センターが高等教育研究者に対して、研究を公募し、研究者に独創性、新規性、将来性のある研究を提案していただき、センター外部の研究者も加わる共同研究委員会が、これらの提案された研究を審査し、選定された研究に物的・人的・経済的支援を行うというものです。このプロセスを経て、高等教育の伝統的な研究に加え、新しい領域の研究の開拓に貢献



できるのではないかと考えています。

コリーグの皆様にご利用の事業へのご理解とご協力をお願いする次第です。

## 14th International Workshop on Higher Education Reform (HER2017) の開催報告

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

2017年9月26～28日の3日間にわたって、RIHEは第14回高等教育改革国際ワークショップ(International Workshop on Higher Education Reform, 以下HER)を開催した。このワークショップは世界各地で、持ち回りで開催されており、昨年度はアイルランド・ダブリンで開催された。日本での開催は、2006年の第3回(於筑波大学大塚キャンパス(現東京キャンパス))以来のことである。

HERは、高等教育の政策改革とその他の主要な変化に関する様々な側面について検討することを目的に、2003年にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学において立ち上げられた。毎回高等教育の最新の動向を反映した主題が定められており、本年度は「Enhancing Performance and Productivity in Higher Education」と題して、世界的に活躍する研究者が集う機会となった。

ワークショップには、世界14国(日本を含む)から60名(うち外国から36人)の参加があった。各国や地域の文脈を踏まえ、高等教育改革とその他の動向等についての研究成果の報告があり、本年度のテーマである高等教育のパフォーマンスと生産性を軸とした活発な議論が行われた。ワークショップは、基調講演3、パネルセッション2、自由報告30で構成され、基調講演にはグレン・A・ジョーンズ(トロント大学)、シン・ジョンチョル(ソウル大学)、吉田文(早稲田大学)の各氏を迎えた。パネル及び自由報告は審査を経ての参加である。そして、2名の報告者による結論と次回開催校であるジョンズ・ホプキンス大学(於米国ボルチモア)からの案内でHER2017は締め括られた。

2017HERの詳細については、以下のサイトを参照されたい。

<http://iwher2017.hiroshima-u.ac.jp/>



## 第45回研究員集会報告

藤村 正司

(高等教育研究開発センター教授)

今年度の研究員集会は、「高等教育の財政問題—資金配分の市場化を考える」と題して平成29年11月23日(木; 祝日)に広島大学学士会館において開催された。本集会の主題は、基盤的経費が削減され、評価に基づく政府主導の競争的な資源配分の流れがどのような歪みをもたらすのか、どのような形で大学への資源配分が望ましいのか、その手がかりを得ることを目指して設営されたものである。

セッションに先立ち、世話役の藤村が趣旨説明を行った上で、セッション1の基調講演「高等教育財政の構造改革に向けて—なぜ混迷が深まるのか—」として合田隆史氏(尚絅学院大学長)から大学への資源配分が拡大しない中で何が起きているのか、どのような打開の手立てがあるのかについて、文部科学省のこれまでのスタンスと今後の想定されるシナリオについてお話し頂いた。

セッション2では、濱中義隆氏(国立教育政策研究所)と二宮祐氏(群馬大学)の司会で、三つの論点提起がなされた。まず、「アメリカの研究大学における資源配分」では、阿曾沼明裕氏(名古屋大学)が米国の研究大学における財源構造の多様性と資源配分のメカニズム、そして部局レベルの戦略的モデルを紹介された。第2の「米国州政府による大学評価に基づく資源配分」では、吉田香奈氏(広島大学)が米国公立大学の達成度に基づく予算配分の特徴、業績評価基準、そして成果と課題について報告された。最後に、「競争的資金配分と教育・研究の歪みについて—学術的価値生産性関数の効率性の観点から—」では、吉田浩氏(東北大学)が大学のタイプに応じて教育・研究アウトプットがどのように創出されるのか、交付金基準による教育・研究の歪みと厚生損失について生産関数を用いて明瞭に示された。

セッション3では、浦田広朗氏(桜美林大学)と丸山文裕氏(広島大学)の司会で、金子元久氏(筑波大学)によるコメントが寄せられた。金子氏は、財政問題を考えるにはお金の配分方法と財源獲得の二つの面があること、今日の財源が金融市場からの借入れが増えているためにリスクを個人が引き受けるようになってきていること、財源獲得のためには大学の組織構造の変化が必要であること、そして生き残りのために教育面での質が重視されるようになれば、大学間で教育と研究が未分化の現状で研究志向の強い大学人がどうやって折り合いをつけるのかなど、財政問題が広がりをもったテーマであることを指摘された。なお、第45回研究員集会の詳細な記録は、『高等教育研究叢書』144号として刊行されるので詳細はそちらを参照頂きたい。



# 高等教育公開セミナー報告

## 平成29年度高等教育公開セミナー

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター副センター長 / 准教授)

本年度は、8月23日(水)～24日(木)にかけて「組織としての大学：大学における組織と個人のあり方を模索する」と題した高等教育公開セミナーを開催した。近年、大学のガバナンス・マネジメント・経営戦略が大学改革の主対象となっていることから、大学を「組織」という単位で改めて捉え直す必要性に迫られている。そこで今回のセミナー講義では、大学という「組織」はどうあるべきか、その中で個人はどのような対応が必要か等について、多様な角度から取り上げた。今年度のセミナーの講師は、例年から装いを一新し、センター外部から講師を招聘し講義していただいた。講師は、組織論がご専門の太田肇先生(同志社大学)、組織の経済学がご専門の菊澤研宗先生(慶應義塾大学)、高等教育における学習支援のご専門の安部有紀子先生(大阪大学)、そして近年では大学改革の支援にも乗り出し、高等教育のグローバル化問題に従事している河合塾を代表して野吾教行先生にお揃いいただき、多様性と学際性に富んだ陣容で展開された。

太田先生からは、「大学の組織改革ーインセンティブ構造からのアプローチ」と題して、大学の組織改革は「あるべき」論や全体主義的アプローチから語られることが多いものの、組織を構成する個人の視点を欠いた組織が機能せず、「絵に描いた餅」となる点が指摘された。その上で、教員・職員それぞれがおかれている現状を踏まえ、それぞれの職業社会学的特徴、インセンティブ、モチベーションの仕組みを整理・提示していただいた。そして、望ましい大学の組織づくりについて、個人の承認欲求が最大化される仕組み、「成果主義」ではなく「成果重視」に基づいて、個人裁量・自律性拡大を通じた意欲の向上や個人の成長を推進する必要性が提言された。

菊澤先生は、「組織は合理的に失敗するー組織の「不条理」とその回避ー」と題し、今日日本で多発している企業の不祥事の原因が、実は人間組織が合理的に不正や非効率に導かれる可能性つまり「不条理」に陥ったことにある点を指摘し、旧日本軍の事例を取り上げて解説された。それらを踏まえ、日本の大学組織の「合理的失敗」については、政府当局から示される大学改革に対し、疑問や反論をすることが人間関係上のコスト(取引コスト)になり且つ補助金カットの恐れもあるため、この取引コストを付度して損得計算した結果、改革に従わざるを得ないという「黒い空気」が発生し、結果的に改悪になるという「合理的失敗」プロセスにあることが提示された。このプロセスを打破するためには、組織としての自律性拡大のための体力強化(独自財源の確保等)、「黒い空気」形成を回避するための個々人の責任ある価値判断が必要であることが示された。





安部先生からは「学習環境の構築のための組織・個人の役割:学生の学習を促進するための支援とは?」と題し、「学習者中心の大学教育」において、大学が組織的に学生の学習を促進するためにどのような支援やアプローチが可能なのかを探るために、米国の事例が紹介され、それを元に学習支援、学生支援に通底する学習環境デザイン、教職員の役割の変化や、学生の学習成果を基盤にしたアセスメント(PDCA サイクル)についてフロアを巻き込んだ活発な討論型の講義がなされた。

野吾先生からは「グローバル社会に対応した大学教育を組織としてデザインする」と題した講義が展開された。講義では、グローバル化に対応するための施策が文部科学省でも大学でも近年活発に打ち出されている今日の状況を踏まえ、河合塾で進めてきた「グローバル社会に対応した大学教育調査」の結果が報告された。併せて、組織としての大学が、グローバル化に対応するために、取り巻くアクターとの関係から成り立つ環境をいかに捉え教育施策に結びつけているかをも例示され、今後大学がグローバル化を始めとした環境変化に組織としてどう対するべきなのかについての示唆をフロアと共に協議された。

以上のように、今年度は外部の専門家を招き、講義に参加することがセンター教員にとってのFDとしても機能するような企画とした。広島大学の職員を始め内外から多くの方にご参加いただき、恒例となる夜の懇親会は大いに盛り上がったことは言うまでも無い。

## 学生シンポジウム報告

### シンポジウム「大学と学生」(第4回) 大学と学生の関係:課外活動の単位化を問う

佐藤 万知

(高等教育研究開発センター准教授)

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

シンポジウム「大学と学生」は、21世紀の高等教育における学生の在り方や大学と学生の関係等について、学生を交えて検討することを目的として、平成26年に始められたものである。4回目の本年度は、「大学と学生の関係:課外活動の単位化を問う」を主題として平成28年8月23日に広島大学情報メディア教育研究センターを会場として開催された。夏季休暇中に開催された本シンポジウムには、朝の早い時間帯からの開催であったが、報告者等を含めて33人の参加があった。

趣旨説明に続く話題提供では、谷田川ルミ氏(芝浦工業大学)を迎え、「“イマドキ”大学生の生活と意識」と題した講話をいただいた。その後、事例報告が愛媛大学、早稲田大学、千葉大学の3大学の学生からあり、それに対して森朋子氏(関西大学)から「学生の「学ぶ」を考える:学習研究の視点から」と題したコメントが寄せられた。最後は、グループに別れた上で、昼食をとりつつ討論が行われ、各グループからの報告でシンポジウムは締め括られた。



シンポジウムの概要は以下の通りである。

日時：平成29年8月23日(水) 9～14時

場所：広島大学情報メディア教育研究センター本館2階セミナー室2・3

プログラム：

1. 趣旨説明
2. 話題提供 谷田川 ルミ (芝浦工業大学)
3. 学生による事例報告
  - ①大久保 遥香 (愛媛大学)「愛媛大学ステューデント・キャンパス・ボランティア制度」
  - ②根岸 苑子 (早稲田大学)「早稲田大学 WAVOC「体験の言語化」」
  - ③嶺 康平 (千葉大学)「千葉大学環境 ISO 学生委員会の取り組み」
4. コメント 森 朋子 (関西大学)
5. ランチ&ディスカッション

## 国際ワークショップ開催報告

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

2018年2月24日、RIHEの主催により「アジア・太平洋地域における大学ガバナンスとリーダーシップについての国際ワークショップ (International Workshop on A Comparative Study of University Governance, Institutional Leaders, and Leadership in Asia and the Pacific)」を広島市で開催しました。

これは国際的・比較的視点から大学ガバナンスや高等教育機関管理者のリーダーシップについての理解を深めようと企画したもので、アジア・太平洋地域と欧州の9カ国・地域から約40名（うち外国から15名）の研究者が出席しました。ワークショップは8つの研究発表を中心に構成され、ノルウェー、オーストラリア、中国、香港、日本、韓国、台湾の各国・地域から招聘した研究者がそれぞれの国の事例や研究成果を報告しました。発表のテーマは「理想的な機関管理者像とリーダーシップ」、「高等教育の改革による大学ガバナンス」、「学長とリーダーシップへの影響」、「1990年代初期から2017年にかけての大学ガバナンスの変化」、「特定大学における管理者の人口学的特徴」など多岐にわたり、発表後の質疑応答では研究手法や各国独自の社会的・政治的背景などについて質問が相次いでいました。

また、今回の研究成果に基づく学術出版や次回開催の可能性、国際共同研究の連携など、本ワークショップの今後の発展の方向性についても意見が交わされました。本ワークショップのプログラムなど詳細は下記の URL をご参照ください。<http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2017/12/7bee0f427093e6aee0c9f1d5df5de62c.pdf>





## 2017年度の公開研究会

\*肩書は当時のもの

	講 師	テ ー マ
第1回 (2017/5/30)	ブリジット・フリーマン氏 (メルボルン大学・研究員)	アジアにおける STEM と人文科学
第2回 (2017/5/31)	デイビッド・D・デイル氏 (ノースカロライナ大学チャペルヒル校・教授)	市場に基づく政策と高等教育：大学における効率と学術的質の保証と向上
第3回 (2017/6/16)	ジェームズ・ウィリアムズ氏 (ジョージワシントン大学・教授)	アジア太平洋地域における高等教育国際化の指標開発とその応用
第4回 (2017/7/18)	スコット・ウィルバー氏 (南カリフォルニア大学・博士課程後期)	米国人から見た日本の企業と経済産業政策
第5回 (2017/9/10)	渡邊 浩一氏 (大阪経済法科大学・准教授) 井上 義和氏 (帝京大学・准教授) 大場 淳氏 (広島大学高等教育研究開発センター・准教授) 田中 秀明氏 (明治大学・教授) 崎山 直樹氏 (千葉大学・講師) 二宮 祐氏 (群馬大学・准教授)	『反「大学改革」論』を巡って—教育・研究とガバナンスの現在—
第6回 (2017/11/13)	サイモン・マージンソン氏 (ユニヴァーシティ カレッジ ロンドン・教授／センター長) ヴァンダー・ウェンデ氏 (ユトレヒト大学・教授)	・高等教育における社会的・個人的形成—東洋と西洋の共通性と相違性に関する思考 ・新しいシルクロード：中国とヨーロッパにおける高等教育と研究協力へのインプリケーション
第7回 (2017/11/13)	スーザン・アルバティーン氏 (大阪大学高等教育・入試開発センター特任教授)	広島大学高等教育研究開発センター・教育本部主催 第1回公開研究会 広島大学 第13回スーパーグローバル大学創成支援事業公開セミナー アメリカの大学における教養教育—現状と課題—
第8回 (2018/2/2)	宇都宮 徹氏 (東洋経済新報社 編集局・就職四季報プラスワン編集長) 田中 久貴氏 (東洋経済新報社 データ事業局・データベース営業部) 村澤 昌崇氏 (広島大学高等教育 研究開発センター・准教授) 松宮 慎治氏 (広島大学高等教育 研究開発センター・博士課程後期) 中尾 走氏 (広島大学高等教育 研究開発センター・研究生) 速水 幹也氏 (椋山女学園大学)	「可視化」「数量化」される大学を再考する：東洋経済新報社『大学四季報』を活用した大学ガバナンス・財務経営分析の試み／薬学教育改革以後の薬学部における機関別アウトカムに関する考察

## センター往来【2017年4月～2018年3月】

\*所属は当時のもの（敬称略）

### ＜2017年＞

4月 Richard James, Emmaline Bexley, Chi Baik（メルボルン大学）米澤 由香子（東北大学）山本 眞一（桜美林大学）勝野 喜以子（成蹊大学）清地 秀哲, 有馬 俊幸（中国経済連合会）天野 誠一（ちゅうごく産業創造センター）本郷 満（中国地方総合研究センター）

5月 Brigid Freeman（メルボルン大学）David D. Dill（ノースカロライナ大学）安部 有紀子, 和嶋 雄一（大阪大学）

6月 James H. Williams（ジョージワシントン大学）

7月 Scott Wilbur（南カリフォルニア大学）

8月 谷田川 ルミ（芝浦工業大学）森 朋子（関西大学）太田 肇（同志社大学）菊澤 研宗（慶應義塾大学）安部 有紀子（大阪大学）野吾 教行（河合塾）

9月 なし

10月 なし

11月 Simon Marginson（ユニバーシティ カレッジ ロンドン）Marijk van der Wende（ユトレヒト大学）Susan Albertine（大阪大学）第45回研究員集会招聘者〔合田 隆史（尚絅学院大学）阿曾沼 明裕（名古屋大学）吉田 香奈（広島大学）吉田 浩（東北大学）金子 元久（筑波大学）濱中 義隆（国立教育政策研究所）二宮 祐（群馬大学）浦田 広朗（桜美林大学）〕

12月 なし

### ＜2018年＞

1月 Brotherhood, Thomas David（ロンドン大学）磯田 文雄（名古屋大学）

2月 宇都宮 徹, 田中 久貴（東洋経済新報社）速水 幹也（相山女学園大学）遠藤 健（早稲田大学）戸田 千速（東京大学）劉 輝, 孟 衛青, 湯 曉蒙（広州大学教育学院）

3月 羽田 貴史（東北大学）山本 眞一（桜美林大学）黒澤 泰（茨城キリスト大学）

## 新任者・離任者・就職者から一言

### 2018年度客員研究員



葛城 浩一(くずき こういち)  
香川大学 大学教育基盤センター 准教授

この度は、貴センターの客員研究員としてお声がけいただきありがとうございます。私は、2003年からの3年間、COE研究員として貴センターに奉職しておりましたので、このような形でまた貴センターの一員となれたことを大変感慨深く思います。

香川大学では、ここ数年、学長特別補佐を拝命しております。最近では第3期中期目標・中期計画関係で忙殺される毎日です。腰を据えて研究ということが年々難しくなっていますが、ボーダーフリー大学(受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学)についての研究は細々と続けています。貴センターにどれだけお役に立てるのか甚だ自信はありませんが、皆様どうぞよろしく願いいたします。



橋本 勝(はしもと まさる)  
富山大学 教育・学生支援機構教授/教育推進センター副センター長

岡山大在任中2005年度から客員研究員を務めさせていただき、再度の着任です。当時、岡山大だけが突っ走っていた「学生参画型FD」は今や全国約80の国私立大学で活発に行われており、毎年3回、岡山大や様々な大学に全国から多くの学生・教職員が集う全国イベント(学生FDサミット, i\*See)も活発です。また、かつて当センター長在任中の有本章先生が「橋本メソッド」と名付けた私の独自の授業実践も様々な大学に広がり、「ライト・アクティブラーニング」という造語と共に、さらに広まりつつあります。かつて「岡山から日本の大学教育を変える」と豪語していましたが少し実現できたのではという自負があります。大学人としての残り年数も少なくなってきましたので「富山から日本の大学教育を変える」ためもうひと踏ん張りしたいところです。



野吾 教行(やご のりゆき)  
学校法人河合塾教育イノベーション本部教育研究部 職員

このたびは、貴センターの客員研究員の任を拝し、誠に光栄に存じます。私は2010年より所属部署が実施する大学教育力調査プロジェクトに参加し、「大学のアクティブラーニング調査(2010~2015年度)」「グローバル社会に対応した大学教育調査(2016~2017年度)」に取り組み、これらの成果を河合塾編著による書籍やセミナーなどを通して発信しております。特に2017年度調査は文部科学省委託「日本人の海外留学の効果測定に関する調査研究」の枠組みのもと実施し、ここでは貴センターからの力強いお力添えもいただき完遂することができました。こうして得た知見や河合塾が有する高校や大学へのネットワーク、経営学および経営組織論の視座を活かして貴センターに貢献できるよう努める所存です。どうぞよろしく願いいたします。



北村 友人(きたむら ゆうと)  
東京大学大学院教育学研究科准教授

この度は客員研究員の機会をいただき、誠にありがとうございます。国内外における高等教育研究の中心的な拠点で研究員を務めさせていただけることに、身の引き締まる思いです。

私は、急速に拡充するアジア諸国の高等教育システムの変化に関心をもちながら、とくに国際化を促進するための政策のあり方や、大学・政府・国際機関といった多様なステークホルダーの連携について研究しております。なかでも、カンボジアなどの途上国において、大学教員を取り巻く環境や私立セクターの拡大がもたらす影響についての分析を進めています。貴センターから多くのことを学ばせていただきながら、これらの研究をさらに積み上げることで、少しでも貢献できればと思っております。どうぞよろしく願い申し上げます。





**吉田 浩 (よしだ ひろし)**

東北大学経済学研究科教授/高齢経済社会研究センター長

高齢経済社会研究センターは少子・高齢社会の進展を経済学の見地から分析することを目的としている。高齢社会というと高齢者の福祉の面にのみ焦点が当てられがちであるが、社会の持続可能性の見地から、若年世代の人的資本の伸長も重要な研究対象となる。退職高齢者/若年生産者人口の比率からすると1960年代に比して、2050年にはおよそ10倍の若年生産力すなわちより高い人的資本が必要になる。この考え方からして、広島大学高等教育研究開発センターでは、個人の教育、進学というドックスな研究アプローチに加えて、個人の高等教育の社会、将来、他の世代への影響とその最適資金調達という経済社会的な側面から知見をより多く得られるように尽力したいと考えております。



**朴澤 泰男 (ほうざわ やすお)**

国立教育政策研究所 高等教育研究部 総括研究官

このたび客員研究員を拝命し大変光栄に存じております。貴センターには一橋大学在職中、特にお世話になりました。高等教育研究の「聖地」を再訪させていただく機会を楽しみにしています。

これまで、教育社会学分野の研究系譜を踏まえ「地方には、なぜ大学進学率の低い県があるのか」を研究し、学位論文の内容を基に『高等教育機会の地域格差』を上梓しました。

もともと教育行政学が専攻で、4年目を迎えた現勤務先では、「役所(側)の論理」を内在的に理解する上で貴重な経験を得ています。

自由な研究交流の場に参加させていただくことを通して、さらに研鑽を積んでいきたいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

**2018 年度学内研究員**



**高藤 大介 (たかふじ だいすけ)**

大学院工学研究科情報工学専攻 助教

この度、伝統ある広島大学高等教育研究開発センターの学内研究員として参加することとなり、大変嬉しく思います。私はこれまで工学研究科情報工学専攻において、主に効率的なアルゴリズムの設計と実装に関する研究を行ってきました。以前は貴センターとは縁がないと思っていましたが、交流をもつてみると今では分野の境界はほぼなくなっていると感じました。新たな発見に期待しながら、貴センターの発展のために微力ながら貢献したいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。



**杉野 利久 (すぎの としひさ)**

大学院生物圏科学研究科 准教授

このたびは、伝統あるセンターの学内研究員を拝命し、大変光栄です。私の専門は家畜飼養学であり、特に乳牛の栄養生理学を専門として研究しております。所属する生物圏科学研究科は、農学を主幹とした教育研究をミッションとしており、フィールド演習など現場での教育に重点を置いております。専門は前述の通り、日々ウシとにらめっこをする内容ではありますが、理系、特に応用科学に属する農学や畜産学での教育方法のあり方などが全国的に問われるようになってきており、この頂いた機会を有意義に活用し、今後の当該分野の高等教育の果たすべき役割などを考えたいと思います。

**2017 年度離任者**



**秦 由美子 (はた ゆみこ)**

関西外国語大学教授

有本章先生と山本眞一先生にお世話になる形で2008年7月に着任以来、約10年もの間高等教育研究開発センターでは皆さんに支えていただきました。心から感謝しております。ただ、母がいつ帰ってくるのかとしきりに問

う中で、漸く関西に戻れることになったこの時に母を亡くしたことが悔やまれます。新たな職場では高等教育から一步離れ、「イギリス学」や英検一級、アカデミック・ライティングなどを学部と大学院の学生に教えることになります。また、出来れば、日本人がネイティブと対等に渡り合えるレベルにまで学生を導けるような英語学習法を考えたいと思っています。最後になりましたが、センターの更なる進展を心より祈っております。皆さん、お元気で。

## 就 職 者



李 麗花 (り れいか)

九州大学学務企画課企画専門員

この度、九州大学学務企画課企画専門員として採用されることとなりました。勤務し始めて自分自身がセンターの教職員た

ちに如何に甘えていたのかに気づき始めました。自分の好きなことを自由にやれる場所は、センター以外はないのではないかと思います。センターでの研究生活は私にとって一生の宝物であるし、今後の研究活動にも良い経験になると存じます。

一方、就職が厳しい中、外国籍を任期なしに雇用してくれた九州大学には、本当に感謝しております。院生時代には、本や論文を読めば読むほど、常に理解しづらい内容がたまっていて、それが現在の仕事を通して、少しずつ整理ができ、理解できるようになりました。むしろ、大学システム内で働けるからこそ、高等教育についての研究も継続できるのではないかと思います。さらに、九州大学での仕事を通じて、自分の今までの研究内容が如何に重要であるのかについても、伝わってきました。

仕事と研究を両立しながらさらに成長していきたいし、職場での仕事を通じて今後の研究活動を促進されるように頑張っていきたいと思います。これからも、ご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

## 修 了 生



川口 博之(かわぐち ひろゆき)

博士課程前期修了(2018年3月)

この春、なんとか博士課程前期を修了することができました。ここに至るまで長い年月を必要としましたが、充実し恵まれた時間とすることができましたのは、大場先生をはじめとする先生方の熱心なご指導のおかげであり、心より感謝しております。また、ご支援いただきましたRIHE事務室の皆さま、励まし導いていただいた院生の先輩方や仲間達、あわせて応援いただいた職場の皆さまにお礼申し上げます。本当にありがとうございました。今後は、RIHEで学んだことを活かすとともに、生涯にわたり学び続けるよう努めたいと考えております。今後ともよろしく願い申し上げます。



長岡 朋子(ながおか ともこ)

博士課程前期修了(2018年3月)

この度、博士前期課程を修了致しました。大阪の私立大学事務職員として勤務しながらの課題作成や論文執筆に追われる日々は、時間的にも距離的にも厳しく、挫折してしまいそうなこともありました。しかし長期にわたりご指導賜りました大膳先生、また授業にて大変興味深い内容を教示下さいました先生方、事務局の皆様、そして社会人の授業受講への配慮をいただいた同窓の院生の皆様のお陰で、無事修了することができました。心から感謝申し上げます。今後も高等教育に携わりながら、大学のグローバル化と学生の成長、さらには高等教育行政まで、RIHEで学ばせていただいた経験や学びを糧に、ひきつづき幅広い視点から考察していきたいと思います。



于 洋(う よう)

博士課程前期修了(2018年3月)

広島大学高等教育研究開発センターにて、2016年より黄福涛教授にご指導いただき、2018年に博士課程前期を修了すること

ができました。僅か2年間でしたが、非常に貴重な経験だと思っております。特に、センターの先生方、職員の皆様、院生の皆様に大変お世話になり、心よりお礼申し上げます。

皆様のおかげで、2018年4月から日本の会社で会社員として働き始めます。新生活に様々な不安を抱えていますけど、今までセンターで身につけた知識・能力を活かして、新たな人生に向けて一生懸命頑張りたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。最後に、センターの益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



王 嘉 (おう か)  
博士課程前期修了 (2018年3月)

お世話になりました。  
この度、博士課程前期を無事に修了することができました。

RIHEで、研究生から院生卒業までの3年間、センターの先生方には、ご指導をいただきまして誠にありがとうございます。先生方から応援してもらったおかげで、実りある学生生活を送れ、たくさん素晴らしい思い出を作ることができ、本当によかったと思います。また、職員、学生の皆様から、色々と助けていただきまして、心から感謝しております。

最後に、研究や課題でわからないことがあった時、いつも親身になって相談にのってくださった私の主指導、大膳司先生にお礼を申し上げます。これから、中国に戻って、立派な社会人になれるよう頑張っていきたいと思えます。

引き続き、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお祈り申し上げます。



周 学文 (しゅう がくぶん)  
博士課程前期修了 (2018年3月)

私は、高等教育機関の財政改革に関心を持ち、修士2年間に「研究生産性に対する運営費交付金及び競争的資金の有効性に関する検証」を研究してきました。このうちに、高等教育学分野で高い専門性を備える先生たちから終始適切な助言を、また丁寧な指導して頂きました。ここに感謝いたします。また、大学院生の方々など研究室のメンバーとは非常に刺激的な議

論ができ、精神的にも支えられました。非常に勉強になりました。この2年半で、高等教育学の知識のみならず、研究者としての考えと能力も身につけました。このセンターで有意義な留学生生活を過ごせてよかったと思います。楽しかったです。今後は、大学院で学んだことを活かし、就職したいと思えます。



薄 学 (はく がく)  
博士課程前期修了 (2018年3月)

2015年に研究生としてセンターに入ってから2年半、センターの先生及び事務の方々、共に研究室で勉強してきた先輩、後輩及び同期の皆様のお世話になりました。心より厚く御礼を申し上げます。

センターでの生活を通じ、学生として知識を学ぶことだけでなく、研究員集会のスタッフや情報調査室の事務補佐のほか、入学後「後輩」から「先輩」にシフトする過程において、様々な体験をし、責任を学ぶことができました。

一方、研究に関しても、授業で身につけた研究手法、特に質的研究法を、修士論文を作成する際のインタビュー調査で、異なる学術分野の方の、物事を考えるアプローチを分析することで、より深く理解することができました。今後も、研究に対する熱意を持ち続け、精進していきたいと存じます。



林 師敏 (りん しびん)  
博士課程後期修了 (2017年11月)

広島大学高等教育研究センターにて、黄福涛教授にご指導いただき、博士学位(教育学)を取得し、卒業することとなりました。センターでは、高等教育制度や課題について多角的な視点から研究に取り組みました。自律的な研究遂行能力を獲得することのみならず、学会や研修会に参加することができ、日本国内外における高等教育研究者と交流することができたと思っています。センターで過ごすことができたこと、副指導先生の大膳司教授、秦由美子教授、村澤昌崇准教授を含めたセンター教員のご指導と職員皆様のご支援に、心からお礼申し上げます。



今後はセンターで学んだことを活かして研究をしたいと思っています、引き続きよろしくお願いたします。

## 新 入 生



陳 禹奇 (ちん うき)

博士課程前期入学 (2018年4月)  
※ 研究生より進学

2018年4月より博士課程前期  
に入学した陳禹奇と申します。

2017年4月から研究生として

RIHEで勉強しはじめました。この一年間、大膳先生をはじめとする諸先生方には大変お世話になりました。心から感謝しております。

私にとって、この時期は人生の新しいスタートです。これから、有意義な留学生活を送り、自分の目標の達成に向けて努力して、真面目な研究者になるように一生懸命頑張りたいと思っています。このまたとない機会を大切に、視野を広げ、研究を一層深めることを希望しております。今後とも、諸先生方、先輩の方々、そしてサポートくださる事務室の皆様、どうぞよろしくお願い申し上げます。



中尾 走 (なかお らん)

博士課程後期入学 (2018年4月)  
※ 研究生より進学

2018年4月より広島大学教育  
学研究科博士課程後期でお  
世話になることになりました、

中尾走です。2017年4月より1年間、研究生としてお世話になり、なんとか博士課程後期に進学することができました。このセンターに研究生として来てからの1年間は、とても充実したものであり、これから院生としての学生生活がとても楽しみです。まだまだ高等教育に関する知識が不足しているので、これからしっかりと勉強していきたいと思っています。最近、計量分析だけでなく、数理モデルで大学の組織行動を説明することや、SNSから取得したビッグデータを用いたPost-Truth時代における科学への批判の構築にも関心があります。これからよろしくお願いたします。

※上記の方々以外に、2018年4月は樊 怡舟さんが博士課

程後期に入学されました(前期課程より進学のため省略)。

## 外国人客員研究員

Thomas David Brotherhood

(2018年1月~2019年1月まで滞在予定)



My name is Thomas Brotherhood, and I'm a PhD student at the UCL Institute of Education. I was welcomed to RIHE in mid-January

having received a JSPS Pre-Doctoral Fellowship to undertake a portion of my doctoral research under the joint supervision of Professor Huang. My research topic concerns the migration of international students in Japan, and the opportunity to undertake a prolonged period of intensive fieldwork is immensely valuable; to do so with the guidance of a community of scholars such as that at RIHE, doubly so. These first two months have been an absolute pleasure and I feel extremely lucky to be a part of this academic community. Each and every member of staff and faculty has gone to extreme lengths to aid my adaptation to both general and academic life, and my research has already seen the benefit of this support. I hope that in my remaining time at RIHE I can continue to enjoy my research and lay the foundations to make a good contribution in my field. Most of all I wish to become a helpful and valued colleague with lasting links with the academic community at Hirodai and beyond.

# 情報調査室だより

今回はセンター出版物の閲覧・検索方法をご紹介します。

各種出版物は、ホームページ上で全文の閲覧・入手(\*)や書名・著者名等での検索を行うことができます。

\*著者の許諾がとれている論文のみ全文を公開しています。未公開論文の入手方法については、直接お問い合わせください。

出版物ページへのアクセス方法は下記の通りです。是非、ご活用ください。



## < 出版物サイトへのアクセス方法 >

その1. センターホームページ トップ画面からアクセスする場合

出版・情報サービス  
→ 出版物・出版活動

その2. 情報調査室ホームページ トップ画面からアクセスする場合

センター出版物一覧



## < 検索方法 >

センターの所蔵資料検索システム『文献情報総合検索』をご利用ください。

全文公開の許諾が取れている論文は、検索結果に PDF ファイルがついています。

<http://rihejoho.hiroshima-u.ac.jp/search/>



## 『文献情報総合検索』システムへのアクセス方法

センターホームページトップ画面一番下【センターデータ活用のすすめ】または、情報調査室ホームページトップ画面をご利用下さい。